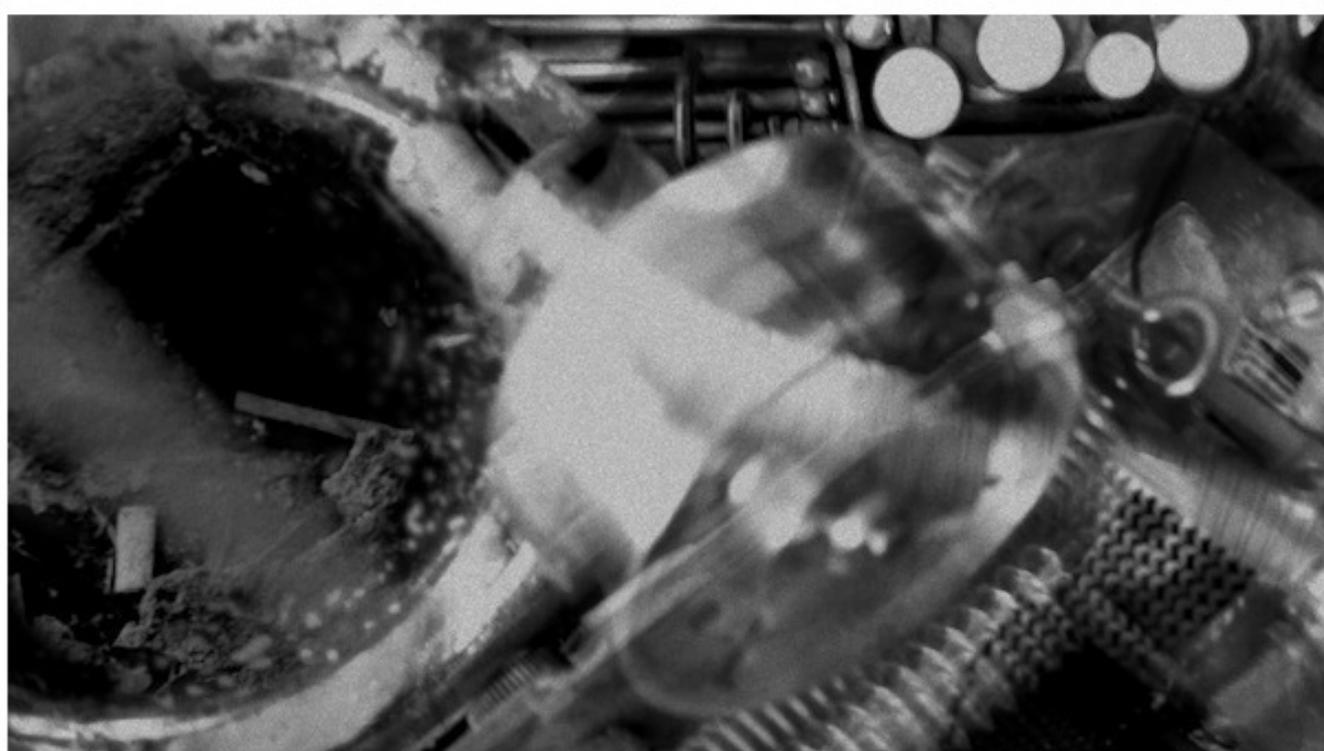


# 管



西園寺隆憲

蝉の音が聞こえる。

耳の中に蝉がいるのではないかとこのほど煩く聞こえる。

時折、自分の携帯電話の着信音が鳴ってるような気がして、確認してみるが着信は無い。それにしてもこの暑さと日差しには辟易する。もうすぐ夕方の五時だというのに陽炎がゆらめくほどの熱気だ。俺は眩暈がした。目の前に黒や銀の粉が瞬いた。立ってられないということはないが、立ち止まって下を向いた。汗が顎を伝ってアスファルトに落ちた。その水滴黒い点を見ていた。蝉はジージーとそこかしこで音を立てている。何のためにそんなに喧しく騒ぎたてるのか、短命を呪っているのか、もしくは地上に出れた喜びを謳歌しているのか、どちらにしてもつまらない事だ。長く生きたところで見たくないモノ、知りたくないモノ、関わりあいたくないコト、聞きたくないコト、そんなものがあるだけだ。地上の喜びなど無い。地面の中にも喜びなどは無いが、ここよりは涼しいだろう。ハンカチで拭うのも無駄なほどの汗がアスファルトに落ちて吸い込まれていく。地面に吸い込まれていく。

「大丈夫ですか？」

薄い日陰が差し出され、声をかけられた。ああ……薄い日陰は日傘だったのか。白い日傘。そして涼しげな女性。汗一つかいていない。

「大丈夫です。少し眩暈が……」

言い終わらないうちに会釈をして女性は歩き出した。後ろから見るそのいでたちは平成の時代には似合わない着物姿だ。まるで昭和初期いや、大正時代のように。薄い夏物なのだろう和服の事はよくわからないが凝視すると身体の線が見えそうな錯覚に陥る。纏め上げた髪が少しほぐれて頸にかかっている。その髪を左手の、白く細い左手の中指で戻そうと

……弄んでいる。弄んでいる指が白い……

こんな都会の真ん中なのに蝉が煩いのは京都御苑の近くだったのか。細かい路地を歩いているうちにこんなところまで来てしまったのか。目的地はどこであったか。そんなこともわからなくなっていた。ひたすら汗を流して、衣服がずぶ濡れになるほど汗を流して歩いて来たのは……あの女に出逢うためだったのだ。早く追いかけてなければ、曲がり角を曲がってしまう。外界と遮断するためのように高い塀の向こうに消えてしまうじゃないか。京都の街はなぜ塀が高いのか。ああ……まだ、曲がったすぐのところを歩いている。見れば見るほど身体の線が視える。顎が

白い。後ろを気にしているようだ。そうか、あの女も俺を待っていたんだ。尾行していることは承知の上なのだ。腰の辺りが誘っている。俺を誘っている。汗は止め処なく流れている。腋の下から流れた汗は腰のベルトの辺りまで濡らしている。しかし、俺は休まず尾行する。

——追いかけても無駄ですよ——

誰だ……辺りに人はいるが誰も俺に話しかけてはいない。それにしても蝉が喧しい、煩い。追いかけても無駄とはどういうことだ。無駄ではない。なぜならあの着物の女は俺を意識している。その証拠に立ち止まれば女も立ち止まっているじゃないか。ああ……見ただけで匂いがするようだ。女の匂いがする。雌特有の匂い。追いついて肺一杯に吸い込んでやる。俺は尾行を再開した。女はそろりそろりと弄ぶように前を歩く。

ぴりぴりぴり——

もう少しで追いつく。此の手で捕まえてやる。匂いがする。

——追いかけても無駄ですよ——

無駄なものか。もうすぐ手が届く。乱してやる。此の手で。その曲がり角の先で。

ぴりぴりぴり——

その角を曲がったところで……

「追いかけても無駄ですよ！」あ、赤い唇がそう告げた……のではなく、誰もいない。女が消えた。曲がり角をまがると消えた……

ぴりぴりぴり——

携帯電話が鳴っている。見たこと無い番号だ。

「もしもし……」

「もしもし……だから言ったじゃないですか、追いかけても無駄だってね……」

電話はそう言って切られた。着信履歴はない。蝉は煩い、そして汗は流れている。もうすぐ夕方の五時なのに、陽炎がゆらめきそうな熱気だ。日暮はまだか……

.....それは、化かされたようじゃな.....

「はっ？バカサレタとおっしゃいましたか？」

手を大型の石油ストーブにかざしながら老人は小声で言った。俺はストーブから少し距離をおいた木製のベンチに腰掛けて項垂れていた。ここは山間の小さな駅の待合のようだ。辺りはすっかり闇に包まれているようだ。都会と違い窓から外を見ても明かりらしきものは見当たらない。まるで時間や季節が消失したように感じる。ストーブの上で菓罐がしゅうしゅうと音を立てているので冬であろう。

こんなにも闇が残っている。平成の世も捨てたものじゃないな。

木枠のガラス窓にびっしりと付いた結露を拭い、闇を見渡してみる。遠くに目を凝らしてみても、すぐそばを凝視してみてもただの闇にしか見えない。距離まで喪失してしまいそうだ。

.....まあ、昔の人々がな、理解しがたい怪異などに出くわした時に、己を納得させる為に考えた方便じゃな。嘘じゃな。狐狸の類のせいにしておけばよいと云う生活の知恵でもある。そうせなんだら、己の気がふれたと思わなならんじゃろ？ああ、あなたの気がふれているのであれば失礼な話しじゃがな.....

気がふれている？俺が？そうであっても別に困ることはない。此の世を生きるということは気が狂った行いなのだから、むしろ望ましいことでもある。窓ガラス越しでは満足できなくなってきた。あの距離感や時間軸や季節感、現実感の消失した闇に溶け込みたい。溶け込んだらどんなに気持ちがいいだろうか。己自身も闇と同化して、魂だけがフワフワと漂って.....肉体などは重いだけなのだなあ。ガラス越しに見ているだけでこんなに気持ちいいのだから、外に出て溶け込めばどんなに気持ちがいいだろうか。外に出てみるか。

.....気がふれておられるのか？.....

ふれてますよ。ふれていてもいいんですよ。ところで.....

.....あなたが窓から見ておられる方向に谷があり、その向こうには山があります.....

「なんです！闇に溶け込んでいくところを邪魔しないでください！現実には」

.....昔は夜になるとその山肌にポツポツと火が灯ったのです。ポツポツと.....ある時はいっせいに、またある時は断続的にね。狐がいたずらしておると村の大人は言ったものです。最近狐

もいたずらしている暇がないのか、灯らないですよ。ええ……それは科学的に解明されているらしいです。空気が綺麗じゃないと見れないらしいですな……

「いい加減にしてください！俺は、俺は今闇と同化したいんですよ！」

……ポツポツとな、見えるじゃろ？……

見えますよ……あれが……幻覚なのですか？

どう見ても現実のあかりにしか見えませんが……

まるで……吸い寄せられるような……心地よいあかりです

闇に溶け込み……あの光点に吸い寄せられる……

ところで、あなたは、誰なのですか？

闇は答えてはくれない。老人など、何処にもいない。化かされたのじゃな……また

## 雨夜

---

闇に溶け込む……雨。それも夜の海に溶け込む雨。

まるで、地球上に存在する俺自身のように。事実はあるものの意味などない。

膨大な海水に微々たる真水が混ざりこんだ、いや、溶け込んだところで圧倒的な海にはなんら影響はない。しかし、事実としては海に雨が降る。数え切れないほどの真水の雫が注ぎ込まれる。塩分濃度が何億分の一か薄まったところで海には何も変化はない。ひたすら闇を映し出す巨大な鏡であり、それ自体が生き物のよううねる。うねりは世界中に広がり、何事も無かったかのように繰り返す。

この地球上、いや、現世から俺が消えたところでなんら変わりがないように。海に真水は溶け込み、闇も溶け込む。ああ……羨ましい闇であり雨であり海。

ざあ—————

海辺に住んでいる以外に雨の夜に海に行くことはまず考えられない。その匂いすら正確に感じることはできない。どんなだろうか？きっと悲しくて、切ない、終わりの匂いがするんだろうね——と君は言った。白い病院のベッドで君は言ったんだよ。見たいのか？見えないのよ。感じるのよ。

——闇に降る雨は感じるのよ。

君が言ったんだよ。闇は何者であれ優しく包み込み、溶かしてしまうのよ。海の存在は分かっている。雨が己の身体をびしょ濡れにしようとも。闇は溶かしてしまうのよ。あなたも私も解けていくのよ。視力など必要ないわ……肌で直接感じたいのよ……あなたを

ざあ—————

テレビの雑音は、次の放送を待っている。闇夜に雑音だけが見える。

俺は雑音が映し出されるテレビの前で、夜の海に降る雨を思う。それは君の記憶でもあり。俺の記憶でもある。君が言ったんだよ。なのに君は消えてしまったんだよ。

白いベッドと数え切れないチューブを残してね。白い看護師は笑顔で何か言っていたが、その場にはひじょうに不似合いなセリフであったような気がするよ。たしか——

溶け込んだようなのよ……

違うかな。君はどう思うんだ？

「あなたはいつもそうやって東の空が白んでくるのを待っている。それもただ待っているだけ。そんなことで何か解決すると思ってるの！私はここにいるのに！あなたは夜明けを待っているだけなのよ！自分で何もしないで待ってるだけなのよ！」

いけないのか……

ざあ————

雑音はテレビだけじゃなく、この部屋に実在しているのか？

いや、雑音に溶け込む……俺の記憶

闇に溶け込む……雨。

.....ねえ、輪廻ってあるのかしら.....

「ないよ。ないんだよ。彼の世も天国も何もないんだよ。」

「死の瞬間の記憶が永遠に続くだけだよ。」

「それは永遠に続くわけではなくって、その一瞬が永遠になるだけなんだよ。」

.....あなたを待ってるわ.....

「待てないよ。何処で待つって云うんだ！いいかげんにしろよ！」

「此処にいればいいじゃないか！」

白いベッドで君が言ったんだよ。そうだ、俺は優しい言葉はかけられなかったよ。君の目から涙が溢れていても、俺は優しい言葉がかけられなかったんだよ。その時に俺も思ったよ。待っていてくれって。俺も思ったよ。無数のチューブをそこらじゅうに挿し込まれた君が云ったんだよ。白いカーテンが春風で弄ばれていた。遠くのほうから小学校のチャイムが聞こえていた。希望に満ちた歓声が遠くから聞こえていた。

君は小さな時に着たという浴衣の記憶を持っていたんだ。白地に淡い桃色の朝顔の柄だったんだ。大好きだった父親に抱き上げられたんだ。それはモノクロームの記憶だけれど、朝顔だけが淡い桃色なんだよ。俺は知らないけど、今はそのシーンは俺の記憶でもあるんだよ。

不似合いなチューブを外してあげよう.....

君にそんな無機質なモノは似合わないよ.....

「おとうさん、大好き。」

俺は記憶が溶け出しているのかも知れない。此処が何処なのかもよくわからない。ただそれ以降は漂っているだけのようだ。天国も彼の世もないが、確実に存在していると思われる、今という地獄を漂っているだけだよ。冷蔵庫の音で夜中に目が覚めるといつも、あの白いベッドの横にあった、無機質で君に似合わない機械の塊を思い出す。白い部屋に似合わない不自然で無機質な箱.....そこから繋がったチューブ。チャイムが聞こえていたんだっただけかな？歓声が聞こえていたのかな？

俺は君が焼かれてしまうのがたまらなく厭だった。

なぜなら……君は戻ってくるのだから……というよりも、いつも……

「そこにいるじゃないか！」

輪廻ってあるんだよ……君が言ったんだ、白いベッドで……

「あなたは私を誰だと思ってるの？」

その扉を僕が開けることになったのは、街並みに茜が刺す頃だったと思う。

.....誰ぞ、彼は.....

うまく言ったもので、人々の顔がはっきりしない。平成の今も、平安の昔も太陽は変わらずに朝昇り、宵の口に燃え尽きる。燃え尽きる時に人々は正体を無くすのである。

逢魔が刻――魔と逢うのではなく、己の中の魔に気がつくのではないのか？魔がさすなどという言葉もあるが、茜さすころ魔が現れる、己の中の魔が現れる。

コンクリートで固められた一条戻り橋にはもう鬼は棲めない。棲めなくなった鬼は人々の内に隠れ棲んでいるのだ。いや、元々鬼は人の心にも棲んでいた。容易に鬼をあらわにする者、決して鬼をあらわにしない者、その違いがあるだけだ.....と、僕は考えた。

川のせせらぎも聞こえない橋の上に立って。僕は正体を無くすどころか、意識が明瞭になっていく感覚、研ぎ澄まされてゆく感覚に陥っていた。視神経を直撃する燃え尽きる寸前の光がそうさせているのか、もしくは夏の日の灼熱地獄から開放されるという喜びがそうさせるのか、その時、僕は。

永遠に終わること無い此の世の繰り返しに嫌気がさしたわけではない。人間などは虫けら以下にすぎない、此の世のシステムを乱す害虫であり、消えるべきは人間だけなのだ。

俺一人が地球から消えたところで何も変わらない.....

そうだ。一人が消えたところで何も変わらないんだ。全ての人間が消え失せなければ何も変わらない。この街並みにしても、いくら古いとはいえ、人間が造りだしたモノに過ぎない。川は太古の昔から流れていたんだ。今、流れは澱んでいる。コンクリートで固められて澱んで、腐敗して、たまらない腐臭を放つ。人間は腐らせる。申し訳程度に遺された木々はたくましく伸びているが、その中身は死んでいるにちがいない。

蝉は七年の時を地中で過ごし、地上に這い出てきて一週間で死ぬ。時間軸は異常としか言いようが無い。地中の蚯蚓や螻蛄などの生き物が昇天しているが如くに。宵が濃くなってきた今も、馬鹿のように歓声を上げている蝉。お前らはもうすぐ死ぬんだよ。泣いているのか？

追いかけても無駄なのか？

.....ええ、追いかけても無駄ですよ.....

僕は扉に手をかけた。天国の扉に手をかけた。

誰そ、彼は.....あの女に吸い寄せられる男は.....誰そ、彼。

彼の世などない。あるのは永遠の一瞬.....誰かが云っていた。

そして君はいつも目の前にいる。  
無機質なチューブを付けたまま、笑っている。

「そうよ。あの時あなたは外してくれなかったのよ。このチューブを」

外してあげようと思ったけど……できなかったんだよ。俺に意気地がなかったんだ。

「だから私はチューブを付けたまま……」

ここにこうして、ずっと、ずっと、立っている。あなたが蝉の声を聞きながら幻覚を追いかけ  
ている時も、あなたが幻覚の老人に夢幻の中で語りかけている時も、私はここで身体のいたるところに  
チューブを繋いで、身体中の痛みを耐え、身体中の液体を無意味に循環されながら、ず  
っと、ずっと、ずっと、立っているのよ。早くその扉を開けてここに来て。そして、そして、こ  
のチューブをその手で引き抜いてちょうだい……

引き抜いてよ！  
ひきぬいてよ……おねがい

ああ……わかったよ。そっちに行くよ。  
もうすぐ君に手が届く。届けば引き抜いてあげるよ。

俺は血に染まっていた。遠のく意識の中で、君のチューブに手が届いた。  
これで、いい。

管

<http://p.booklog.jp/book/61693>

著者 : onbasarataka

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onbasarataka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61693>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61693>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ